アリストパネス『雲』における「ソピステース」と三種の「知」
—紀元前 5 世紀末アテナイでの「知」の諸相—
‘*sophistēs*’ and Three Types of Knowledge in Aristophanes' *Nubes*: Aspects of Knowledge in the Late Fifth Century B. C. Athens

梶村　哲矢
KAJIMURA, Tetsuya

摘要

This paper attempts to clarify that at least three kinds of knowledge can be detected in *Nubes,* the comedy of Aristophanes. During the fifth and fourth centuries BCE., a great deal of ancient Greek intellectual heritage was produced. Athens was culturally the most prosperous at the age of Pericles and this play is thought to have been produced a little after that around 420 B.C. It thus stood on the border between the brilliance of the age and the subsequent moral devastation in the continuing Peloponnesian War, and is considered to have reflected the intellectual upheavals in the Athenian society at that time. This paper focuses on the word *sophistēs* in *Nubes* whose original meaning is ‘a man of knowledge’, and points out that three types of knowledge are represented under the name of this word. The first is the radical kind of knowledge often attributed to the amoral sophists of the fourth century, the second is the knowledge of natural science advocated by the Presocratic natural philosophers, and the last is the knowledge of traditional values which were home base of the conservative people. Moreover, this paper examines the role of the cloud-goddesses, the chorus of the play. Although they appear to fluctuate in attitude, they prove to side with Zeus through the play and stand for traditional values. Thus we can see in this play the concern and hope of that conservative poet in the face of the intellectual clashes during the late 5th century B. C.

キーワード : *アリストパネス　古代ギリシアと知　ソクラテス　ソフィスト　ノモス/ピュシス*
Keywords: Aristophanes, Knowledge in Ancient Greece, Socrates, Sophist, Nomos and Physis

１．はじめに

古代ギリシア史においては、一般的に紀元前 5 世紀初頭から前 4 世紀末までの約 200 年の時代を「古典期」と呼ぶことが慣例となっている(1)。この古典期と呼ばれる時期が、アテナイを

中心とした古代ギリシアのポリス社会の最盛期であり、そこでは今日まで継承されている古代ギリシアの知的遺産が数多く生み出された。拙論は、古代ギリシアで生み出された「知」には様々な様相のものがあったという仮定のもとで、「知」の実態を考察することを目的としている。それ故、そうした「知」の実態を考察するために、この古典期の中でも特に文化的な繁栄を見たとされるペリクレス時代(2)の前後の時期を考察したい。

拙論では、この点につきアリストパネスによる喜劇『雲』（以下 *Nu.*(3)）を参考にして考察を進めて行きたい。*Nu.*はその第一作が前 423 年に上演され、その後数年のうちに第二作が改作の形で制作された。そして、現存するのは、この第二作であると考えられている。この作品にはペリクレス時代にアテナイで活発となった自然哲学的思考などの「新しい知」が喜劇的に描かれている。なかでも、特筆に値するのは、反道徳的とも言える知を操る人間像が描かれている点である。そのような人間たちが、徐々に衰退していく、ペリクレス時代後のアテナイで勢いを増しつつあったのである。

この作品のストーリーは、借金に苦しむストレプシアデースが自身の息子を瞑想塾(4)に送り込み、瞑想塾で息子に借金を踏み倒すことができる、強力かつ反道徳的な論法を身に付けさせようとするところから始まる。結果的に息子は父ストレプシアデースが望むような論法を身に付け、ストレプシアデースは借金取りを追い返すことに成功する。しかし息子は、今度は逆に父である自分に対して、「父を打擲する」という道徳に反する行為を行い、さらに息子は身に付けたその論法を駆使して自分の行為を正当化し始めるのである。こうした、ある意味では悲劇的とも言える結末が、この喜劇におけるストーリー上の最大の皮肉となっている。

*Nu.*は喜劇作品であるものの、その後も古典期アテナイで発展していった複数の知の姿が描かれているため、文学作品としてだけではなく、古代ギリシアでの思想史研究の分野でも注目されて来た。特に、思想史の分野では *Nu.*で描かれているソクラテス像に着目し、ソクラテスの実像に迫る試みが数多くなされている。なぜなら、*Nu.*がソクラテスの生前である前 5 世紀に、ソクラテス本人を描いた作品としては唯一現存しているものだからである(5)。拙論でも、ソクラテスが、どのような「知の人」として描かれているかを検討する。

はじめに、劇の構成にも関わる問題として、拙論は「アゴーン場面における二つの論法」に着目する。アゴーン場面での教育の問題を巡る討論で、「伝統的な倫理観」に対し反道徳的な言い分が勝利するという展開は、この時代において「革新的な知」が「伝統的な知」を脅かしていた可能性を示唆している。この、「革新的な知」を標榜する ἥττων λόγος（劣った論法）が討論で用いている論理を第二節で考察する。なお、拙論では、倫理観というものを知的な道徳的価値体系と考えるため、「伝統的な倫理観」と、その立場に立つ「論法」を一体のものと考え、これをあえて「伝統的な知」と表現することにする。

また、従来 *Nu.*でのソクラテス像は反道徳的な弁論を教授する「ソフィスト」として描かれていると指摘されることがあったが、*Nu.*を子細に検討すると必ずしもそのように解釈する必要

はないと判明した。この点は第三節で、劇中でソクラテスに対して使用されている「知」を表すギリシア語に着目して考察していく。

さらに拙論では、より文学的な問題として、「雲の女神たちのコロスの役割」を第四節で取り上げる。このコロスは劇の後半で登場人物たちに対して態度を一変させるという展開になっており、その不可解とも言える行動の背後には「伝統的な知」の擁護という目的があったと考えられる。第四節では、この点をコロスと伝統的な神であるゼウスとの関わりから考察する。

先行研究で、「ソクラテス像」と「二つの論法」を論じているものは多いものの、「雲の女神たち」は前の二者ほど着目されておらず、管見の限りでは、「雲の女神たち」の役割をこの劇での「知」と関連付けて正面から論じているものはない。それ故、拙論では、この劇に描かれている「知」と「雲の女神たち」との関係についても考えてみる。

*Nu.*では一般的に「ソフィスト」と訳されることの多い σοφιστής（sophistēs）という名詞が三箇所で使用されているが、それは後のプラトン対話篇で見られるような、否定的な意味合いで使用されているとは必ずしも言えない。この劇では σοφιστής がどのような意味を持つものとして使われているかということが、問題を考えていく上での重要な鍵となる。

２．889-1114 行アゴーン場面における二つの「論法」

889-1114 行に置かれている第一アゴーン場面では、主人公の息子ペイディッピデースの教育権を巡る二つの「論法（λόγος）」による争いが展開されている。二つの論法は擬人化されており、瞑想塾で弁論を教授しているという設定になっている。それ故、このアゴーン場面は、*Nu.*を「知」の観点から考察する際に注目すべき箇所となっているのである。

この二つの論法には固有の名称が付けられていないが、拙論では底本のテクストに基づいて、その名称を κρείττων λόγος と ἥττων λόγος と呼ぶことにする(6)。κρείττων λόγος（以下 Kρ.）とは、これを日本語に訳すと「優れた論法」(7)という意味である。*Nu.*の第一アゴーン場面で Kρ.は、ペイディッピデースに対して既存の道徳の重要性、特にマラトンの戦いで活躍したような優れた戦士を育てることの重要性を主張している。それに対し、ἥττων λόγος（以下 Hτ.）は「劣った論法」と訳すことのできるものである。Hτ.は、Kρ.が主張するような既存の道徳・価値観を全面的に否定し、ペイディッピデースに対して、ピュシスに基づいた新しい価値観を勧めている。

このアゴーン場面の最大の特徴は、「ソフィスト」張りの反道徳的な知である。特に Hτ.が議論の中で展開する「ノモス／ピュシス」の対立に基づく反道徳的な行為の合理化に、その特徴が見られる。あくまで人間が作り出した道徳に過ぎないノモス（慣習）は、必然性を持つピュシス（自然）と比較すると普遍性の点で劣る。それ故、ピュシスに基づいた行動規範であれば、それが反道徳的なものであっても、既存のノモスに優越するという考え方がこの時代に登場していた。こうした点は、後年プラトンがソフィストたちを批判的に描く根拠にもなっている。

もちろん、「反道徳的」であったのは彼らに限らず、いくらかの自然哲学者たちの唱えた新しい「知」も神々を否定したという点では反道徳的と言えよう。しかし、不正な弁論を進んで教授する「ソフィスト」の反道徳性は、能動的なものであり、社会秩序を破壊する力が大きい。それに対し、自然哲学者は進んで社会秩序を破壊しているわけではなく、知的探求の結果が「反道徳的」なものとなったに過ぎない。それ故、その反道徳性は受動的なものである。拙論では、この差異を重視して、「反道徳的」という表現は、不正な弁論を教授する「ソフィスト」のようなケースにのみ用いることとする。

しかし、ここで注意しなければならないのは、「ソフィスト（σοφιστής）」という名称が古典期のアテナイ社会で持っていた意味である。ソフィストたちが、「弱論を強弁する」反道徳的な知を標榜する集団であると認識されるようになったのは、プラトンによる著作活動の影響が大きい。一度プラトンの認識から離れなければ、当時ソフィストと呼ばれていた知者たちの業績を正しく評価できないという指摘は恐らく正しい(8)。アリストパネスが *Nu.*を制作したと考えられる前 420 年前後の時期では、「ソフィスト」の言葉の意味する範囲がプラトンの時代よりも広く、弁論家だけではなく詩人、医者、さらには運動競技選手も「ソフィスト」と表現されていた。ソフィストは主に弁論活動に従事する専門家集団のことだという理解が定着したのはプラトンが活動していた前 4 世紀になってからのことであった(9)。

*Nu.*では、「何らかの専門的な知識」を身に付けている人物に、σοφιστής という語を適用している場面が 331、1111、1309-10 の三箇所ある。以下で、その三箇所を確認してみたい。

Nu. 331-34.（日本語訳は筆者による、以下同。）

οὐ γὰρ μὰ Δί᾽ οἶσθ᾽ ὁτιὴ πλείστους αὗται βόσκουσι <u>σοφιστάς</u>, | Θουριομάντεις, ἰατροτέχνας, σφραγιδονυχαργοκομήτας, | κυκλίων τε χορῶν ᾀσματοκάμπτας, ἄνδρας μετεωροφένακας, | οὐδὲν δρῶντας βόσκουσ᾽ ἀργούς, ὅτι ταύτας μουσοποιοῦσιν.

（それというのも、ゼウスにかけて君は雲の女神たちが大勢の <u>σοφιστής たち</u>を養っているということを全く知らないのだね。トゥーリオイの予言者、医術師、オニキス製の印章付指輪をはめた怠惰で長髪の族、円形のコロスのための作曲者、そして天空の事象を語るいかさま師。女神たちがこれら何もしない怠惰な連中を養っているのは、彼らがこの女神たちを詩で称えているからなのだ。）

Nu. 1111.

ἀμέλει, κομιεῖ τοῦτον <u>σοφιστὴν</u> δεξιόν.

（心配はいらない、君はこの人を巧みな <u>σοφιστής</u> として連れて帰ることになるだろう。）

Nu. 1307-11.

κοὐκ ἔσθ᾽ ὅπως οὐ τήμερον | λήψεταί τι πρᾶγμ᾽, ὃ τοῦ- | τον ποιήσει τὸν <u>σοφι-</u> | <u>στὴν</u> <ἁπάντων> ὧν πανουργεῖν ἤρξατ᾽, ἐξ- | αίφνης καλὸν γ᾽ ὄνασθαι.

（その σοφιστής が、悪事を為そうとして行い始めたあらゆる事々から、突然素晴らしい利益を得るように仕向けるような何事かが、今日間違いなく起こるであろう[10]。）

以上の三箇所の引用の中でも、331 の例で使われる「ソフィスト」という言葉は、予言者や詩人など、何らかの特殊な知識を持った人たちのことを指している。この語は、ソクラテスの台詞に含まれており、瞑想塾へとやって来たストレプシアデースに対して、瞑想塾以外でも様々な「ソフィスト」が存在していることを教える場面のものである。

一方、残りの二箇所は、件の第一アゴーン場面以降に位置している。1111 は、アゴーン場面の末尾で、討論に勝利した Hτ.がストレプシアデースに対して、彼の息子をこれからいっぱしの知識の保有者へと教育すると宣言している。それまでは何の特殊知識も身に付けていなかったこの若者が、Hτ.の授ける知によって σοφιστής になるのである。そして、1307 以下の箇所は、雲の女神たちの台詞であり、息子が瞑想塾で得てきた知識をもらい受けて、実際に借金を踏み倒すことに成功したストレプシアデースのことを「ソフィスト」と呼んでいるのである。このように、σοφιστής という一つの言葉でも、最初の一例と残りの二例とでは、持っている知識の性格に大きな違いがある[11]。

以上の様に、*Nu.*では σοφιστής の語が、プラトンが描くような反道徳的な弁論家にも適用されているが、広い意味での知者全般にも適用されているのである。この点は、後に論じる *Nu.* でのソクラテス像の問題で重要な意味を持ってくる。拙論では、以後、最初の一例のような従来的で不特定の特殊知識を身に付けた人々のことを「ソピステース」と標記し、残りの二例のような Hτ.の知を身に付けた人々のことを「ソフィスト」と標記することとする。

ところで、*Nu.*のアゴーン場面の基礎にあるのは、道徳に関して伝統的な立場に立つ倫理観と既存の道徳よりも革新的な立場を重視する倫理観との対立である。こうした倫理観が「知」と関連付けられるのは、息子ペイディッピデースへの弁論などの知的な教育が、伝統的／革新的どちらの倫理観に基づいて行われるべきであるのかが問題とされているからである。

二つの論法によるアゴーンは、はじめは Kρ.が優勢であるように見える。それは、このアゴーンでは、「ノモス」が支配的な枠組みの中で討論が始まるからである。ノモスとは、法なども含む既存の社会的秩序のことであり、社会の中で生活する人間であれば誰もが当然に「正しい」と見なしている秩序を指す。それ故、このアゴーン場面も喜劇の一場面とは言え、当時のアテナイ社会を前提として制作されているため、ノモスに従った「正論」を繰り出す Kρ.の方が優位な立場にあるのである。そもそも、その言い分が κρείττων λόγος（優れた論法）と呼びならわされていること自体が、アゴーン開始の段階ではこちらの方が優位であったことを示している。

しかし、アゴーンの中盤で Hτ.が巻き返しを図るべく、一つの事実を提示する（*Nu.* 1038-40）。

ἐγὼ γὰρ ἥττων μὲν λόγος δι᾽ αὐτὸ τοῦτ᾽ ἐκλήθην | ἐν τοῖσι φροντισταῖσιν, ὅτι πρώτιστος ἐπενόησα

| τοῖσιν νόμοις καὶ ταῖς δίκαις τἀναντί᾽ ἀντιλέξαι.

（それというのも、私が思索家たちの間で ἥττων λόγος と呼ばれたのは、私がしきたりや正義に対して、これに反対し異議を唱えることを企てた最初の者であるという、まさにこの事実によっているのだ。）

このように Hτ.は、道徳的な面に関しては、自分が'ἥττων λόγος'（劣った論法）であると呼ばれていることを認めたうえで、反論を進めて行く。この箇所から後は、Hτ.が優勢となり、Kρ.が主張してきた既存の道徳をことごとく否定していく。具体的には以下の箇所が典型的である（*Nu*. 1058-60）。

ἄνειμι δῆτ᾽ ἐντεῦθεν εἰς τὴν γλῶτταν, ἣν ὁδὶ μὲν | οὔ φησι χρῆναι τοὺς νέους ἀσκεῖν· ἐγὼ δέ φημι. | καὶ σωφρονεῖν αὖ φησι χρῆναι· δύο κακὼ μεγίστω.

（それから私は弁舌のことへ取り掛かろう。確かにこの者(Kρ.)は、それを若者たちが鍛える必要はないと言っている。だが、私は必要であると言おう。これに加えて、彼は分別を持つことが必要であるとも言っている。この二つは最大のわざわいなのだ。）

Hτ.は、Kρ.が否定的に捉えている「弁舌」を肯定し、反対に肯定的に考えている「分別を持つこと」を否定することによって、既存の道徳を全面的に否定するのである。

従来、この時代には思想上の問題に関して、ノモスとピュシスの対立が見られるとされてきた(12)。同様に、Hτ.が強気にもこのような態度を示すのには、その倫理観の根底において「ノモス」との対比で「ピュシス」を重視する立場を取っているからである。これと関連する内容を、続く箇所で Hτ.自身が口にしている（*Nu*. 1075-78）。

εἶέν. πάρειμ᾽ ἐντεῦθεν εἰς <u>τὰς τῆς φύσεως ἀνάγκας</u>. | ἥμαρτες, ἠράσθης, ἐμοίχευσάς τι, κᾆτ᾽ ἐλήφθης· | ἀπόλωλας· ἀδύνατος γὰρ εἶ λέγειν. ἐμοὶ δ᾽ ὁμιλῶν | χρῶ τῇ φύσει, σκίρτα, γέλα, νόμιζε μηδὲν αἰσχρόν.

（よし、それから私は<u>ピュシスの必然</u>へと話を進める。君は過ちを犯し、恋に落ち、何か不貞な行為をして、そして捕らえられる。君は破滅だよ。なぜなら君は弁解できないのだから。だが私と仲間になって、ピュシスを享受しなさい。跳ねて、笑うがよい。君は何事も恥であるとは思わなくてよいのだ。）

ここで、Hτ.により述べられている τὰς τῆς φύσεως ἀνάγκας は「ピュシスの必然」と訳しうる言葉である。思想史において、ピュシス（自然）が求める欲求は、この世に存在するすべてのものにとって「必然的」なものであり、絶対的な行動規範であるという一つの考え方があった。

その考え方においては、ノモスはあくまでも人間による「思いなし」の結果成立する規範であり、ピュシスと比較して普遍性の点で劣る。ノモス（νόμος）から派生した動詞ノミゼイン（νομίζειν）が、「見なす」、「思う」という意味を持っていることからも、ノモスには主観的な側面があると言えよう(13)。こうした「ピュシスの必然」に基づいた論法を身に付けた者は、弁論として理屈が通れば、本人の望むがまま行動することを正当化することもできるのである。そこでは人間の作ったノモスとしての道徳は顧みられることはない。

最終的に、このアゴーンはHτ.が勝利を収め、息子ペイディッピデースはHτ.から反道徳的な論法を教わることになる。アゴーン場面の後、反道徳的な論法を身に付けた息子は実際に次のような言葉を述べている（*Nu*. 1399-400）。

> ὡς ἡδὺ καινοῖς πράγμασιν καὶ δεξιοῖς ὁμιλεῖν, | καὶ τῶν καθεστώτων νόμων ὑπερφρονεῖν δύνασθαι.
> （目新しくて巧みな物事に親しみ、既存のしきたりを見くだすことができるということは、何と愉快なことであろう。）

ノモスに対してピュシスの優位性を説き、このように既存の道徳に対して嘲笑的な態度を取る若者はプラトンの対話篇において何度か登場するが(14)、それよりも前の時代に制作された *Nu*. の中でも、すでにそうした人物像が描かれているのである。

以上、本節で検討したように、アゴーン場面からは二つの論法の討論を通して、既存の秩序を重んずる「伝統的な知」と、それを真っ向から否定し、既存の秩序を破壊し得る「革新的な知」の二通りの「知」の姿を読み取ることができる。とりわけ、後者の「革新的な知」は後年プラトンが批判的に描くこととなる「ソフィスト」的な知と言ってもよい。*Nu*.が制作された前420 年前後の時期には、こうした「革新的な知」がすでにアテナイの社会で一定の勢力を持っていた可能性が、このアゴーン場面からは見出される。

ただし、この喜劇作品を観ていた当時の大多数の観客たちが、σοφιστής という同じ名称で呼ぶなかで、この反道徳的な知者「ソフィスト」たちと、従来の「ソピステース」たちとの区別をどこに置いていたかという問題がある。瞑想塾の塾長であるソクラテスは「ソフィスト」たちの急先鋒とされているのだろうか。そこで次節では、*Nu*.の 331 以下で当時の「ソピステース」の一人として描かれているソクラテスについて、この観点から考えてみたい。

３.『雲』でのソクラテス像

Romilly (1992)などの少なからぬ研究においても、*Nu*.でのソクラテスは、アゴーン場面でのHτ.と同様に反道徳的な弁論を教授する「ソフィスト」として描かれており、そのことも原因の一つとなって後に裁判にかけられたとされている(15)。したがって、こうした研究ではプラトン

が師ソクラテスのことを、「哲学者」でありソフィストではなかったと強調するために、その対話篇中で、プロタゴラスなどのプラトンよりも前の時代の思想家たちをソクラテスと対決させて、故意に、彼らを「ソフィスト」として批判的に描いた可能性があるとされる(16)。

この点に関し、拙論では、プラトンが対話篇で「ソフィスト」としての対話相手を、「哲学者」ソクラテスとの対比で悪役として描いていることには同意する。しかし、アリストパネスが *Nu.* でソクラテスを反道徳的なソフィストとして描いたという点には検討が必要であると考える。

Dover (1968)は、*Nu.*のソクラテスは反道徳的なソフィストとしての面と、当時の一般的で広い意味での「知識人」としての側面を描いているとしている(17)。さらに、田中（1938 年）は、「一般にアリストパネスは、この作品において特にソクラテスの品性を傷つけるようなことはしていないように思われる」(18)とし、*Nu.*でのソクラテス像が悪役としてのソフィストとしては描かれていないという立場を明確にしている。拙論も、この作品でのソクラテス像は悪役としてのソフィストとしては描かれていないと考えている。

それでは、*Nu.*でのソクラテスが反道徳的なソフィストとして捉えられてしまう原因を考察してみたい。この点に関して、Dover は以下の二点を理由として挙げている。一つはゼウスを明確に否定し（366）、独自の神々を祀っている点（423-24）。そして、もう一つは劇の終盤、Hτ.より息子が無事教育を受け終えたという理由で、ストレプシアデースが塾長としてのソクラテスに報酬を持っていく点である（1146-47）。

ポリスの伝統的な神々を否定ないし疑い、多額の報酬を受け取って知識を授ける、この二点はまさに前 5 世紀半ば以降にアテナイで活躍を始めた、プロタゴラスなどの弁論術教師のイメージと重なるところが大きい。そして、実際にプラトンは『ソクラテスの弁明』（Pl. *Ap.*）で、師ソクラテスに、まさにこの二点に関して反論をさせている（24B-C, 31B-C）。

しかし、この二点だけでは *Nu.*でのソクラテスを反道徳的なソフィストと断定することはできない。まず、一点目の伝統的な神々に対する態度であるが、「不敬」の廉で訴えられたのは、ほぼ同時代にアテナイで活動を始めた自然哲学者たちも同じである(19)。そして、後ほど論じるように、この劇のソクラテスは、進んで既存の道徳を破壊していくような弁論家としては描かれていない。その像は自然哲学者としての「ソピステース」なのである。したがって、ゼウスを認めない「自然哲学者ソクラテス」として描かれたという可能性も十分に考えられるだろう。また、二点目の報酬に関しても、ここでは喜劇作品としての性質から言って、Dover も指摘しているように報酬は穀物などであり、大した価値のあるものではない(20)。それ故、その後の展開でもソクラテスは、ストレプシアデースからの報酬に何の反応も示していないのである。

実際に *Nu.*でのソクラテスが、どのように描かれているかを考察してみよう。まず、*Nu.*で「知」を表していると考えられる σοφός（形容詞「知恵がある」）の関連語からなる σοφ-(soph-)の系統と、φρονεῖν（動詞「考える」）の関連語からなる φρον-(phron-)の系統の原文中のギリシア語に着目して分析を試みた(21)。

その結果、まず、*Nu.*でソクラテス本人について直接 σοφ-系統の語を適用している使用例はなかった。ソクラテスと関連があると見なせる σοφ-系統の語の使用例を、あえて挙げるならば次の二箇所である。一つは、劇の冒頭部分で、ストレプシアデースが瞑想塾の関係者全員を表現した台詞（*Nu.* 94）、もう一つは、すでに第二節で引用した 331 のソクラテスの台詞である（*Nu.* 331）。

ψυχῶν σοφῶν τοῦτ᾽ ἐστὶ φροντιστήριον.
（あれが賢い魂たちの瞑想塾だ。: *Nu.* 94）
οὐ γὰρ μὰ Δί᾽ οἶσθ᾽ ὁτιὴ πλείστους αὗται βόσκουσι σοφιστάς,
（それというのも、ゼウスにかけて君は雲の女神たちが大勢の σοφιστής たちを養っているということを全く知らないのだね。: *Nu.* 331）

これらの箇所では、σοφ-系統の語が複数形で使用されており、どちらもソクラテスをはじめとした「ある種の知」を持った人々のことを指している。94 に関しては、瞑想塾に集う人々を、ストレプシアデースが無知である自分との対比で「賢い」と述べており、特段ソクラテス一人を指しているわけではない。そして、331 はソクラテス自身が、瞑想塾に集う自分たちのような思索にふけるだけの人間を「ソピステース（σοφιστής）」と呼んでおり、ここでは喜劇らしく「ソピステース」を労働しない、役立たずな人間であると皮肉を交えてストレプシアデースに紹介しているのである。そして、先述したように、この 331 以下の文脈では σοφιστής に予言者や詩人も含んでおり、単なる弁論の教師という意味ではない(22)。いずれにせよ、この二箇所の σοφ-系統の語の使用例からは、アリストパネスがソクラテスを不正な弁論を教授する反道徳的な「ソフィスト」として描いたとは言えないであろう。

それでは φρον-系統の語はどうであろうか。*Nu.*で φρον-系統の語の使用例は全部で 50 件あるが、そのうち 16 件(23)がソクラテスの思索活動と関連のある使用例となっている。その中でも特に *Nu.*でのソクラテス像をよく表していると考えられる二件を以下に紹介したい。

一件目は、ストレプシアデースがソクラテスに初めて面会する場面でのソクラテス本人の台詞である（*Nu.* 225）。

ἀεροβατῶ καὶ περιφρονῶ τὸν ἥλιον.
（私は空中を歩き、太陽について思案しているのだよ。）

この 225 の箇所が *Nu.*でのソクラテス像を端的に表していると考えられ、まさにこの劇でのソクラテスは περι-φρονεῖν（思案する）している存在なのである。そして、その思索の対象は天空に関することが中心である。

そして、二件目は瞑想塾に入塾後、ストレプシアデースを訓練する際のソクラテス本人の発言である（*Nu*. 695）。

ἐκφρόντισόν τι τῶν σεαυτοῦ πραγμάτων.
（君自身の問題に関して、何かを考え出してみなさい。）

ソクラテスは雲の女神たちの意向もあって、ストレプシアデースを瞑想塾で特訓することにした。しかし、ストレプシアデースが望んでいる借金を踏み倒すための論法はソクラテス本人が教えることはなく、この695にあるような形で自分自身で考えるようにと指導するのである(24)。

この二箇所から、*Nu*.でのソクラテスは、ある特定の分野に関して卓越した知識を持っている、伝統的な意味での σοφός（賢い）な人物というよりは、新奇な物事を φρονεῖν（考える）し、人には何を教えるわけでもない珍奇な「ソピステース」として描かれているのではないだろうか。このことは、φρον-系統の語の使用例のうちソクラテスに関するものが16件というまとまった件数がある点と、この劇ではソクラテスが第一アゴーン場面以降は重要なことを何も語らないという点からも察せられる。

そもそも、ソクラテスが塾長となっている学校は φροντιστήριον という名称であり、この学校名にも φρον-が含まれている。したがって、この学校にHτ.が存在しているという設定ではあるものの、基本的には「思索」・「瞑想」のための学校であり、塾長ソクラテスは、その学校の代表的な「思索家」と解釈するのが妥当であるように思われる(25)。

この劇を観た当時の観客たちがソクラテスを、Hτ.と同様の反道徳的な「ソフィスト」として捉えてしまったとしたら、それは当時の観客たちが「革新的な知」や「自然哲学的な知」などの「新しい知」全般を区別なく十把一絡げに捉えていたからだと考えられる(26)。作者アリストパネスが、どの程度悪意を持ってこの劇でのソクラテスを描いたのかという点は非常に難しい問題であるが、少なくとも本節で見てきたように、彼は反道徳的な「ソフィスト」としては描いていないと言ってよいであろう。

つまり、*Nu*.でのソクラテスは、アナクサゴラスのような天空の事象を論ずる「ソピステース」と大差ないのである。こうした知も、「伝統的な知」に対する一種の「革新的な知」ではあるが、しかしこのような知を持つ者たちは、反道徳的な「ソフィスト」とは異なる性格の知者なのである。

4．雲の女神たちのコロスの役割

Nu.の結末では、この劇で「革新的な知」を標榜するHτ.と「自然哲学的な知」を唱えるソクラテスについては「皮肉的」とも言える結果を迎えている。Hτ.には、この「論法」から反道徳

的な弁論の教授を受けた息子ペイディッピデースが「自分の父を打擲する」ことを正当化し出すなど分別を持つことまで放棄し、結果父ストレプシアデースは「革新的な知」の弊害を嘆き、息子を瞑想塾に送り出したことを後悔する。そして、ソクラテスは、瞑想塾での息子の教育に関してストレプシアデースから逆恨みをされ、最終的には瞑想塾ごと焼き討ちにあってしまう。

*Nu.*でのこのような展開を見る限り、「革新的な知」と「自然哲学的な知」は、あくまでも喜劇的に揶揄される対象でしかないのである。それでは、この劇で良しとされている「知」は何であろうか。

Kρ.は、アゴーンにおいて Hτ.に敗れ、この劇からは退場したという設定になっている。しかし、この劇のコロスをなす雲の女神たち（以下本節では「コロス」とする）の存在を考えると、この劇では最終的に、Kρ.が持つような「伝統的な知」が最上位に置かれていると考えることができる。

この劇のコロスが、「知」の問題に関して取っている立場が分かりにくいのは確かである(27)。その最大の理由は、劇の冒頭でコロスたちは、ストレプシアデースの反道徳的な動機を理解したうえで、彼を瞑想塾に入塾させていると解釈できるのにもかかわらず、急に 1458 以下で態度を変え、ストレプシアデースたちの反道徳的な行為を非難し始めるからである。この気まぐれとも見える、劇の後半でのコロスの役割の変化をどのように解釈するかという点は、この劇全体をどのように解釈するかという大きな問題につながっている。

本節では、こうしたコロスの役割について考えてみたい。Dover (1968)は、コロスが「雲」とされたことの意味を分析し、アリストパネスの他の作品中のコロスとも比較している。特に参考になるのは、以下の二点である(28)。一つは、古代ギリシア人たちが雲を神格としては祀ることはなく、雲はゼウスが雨を降らせるための単なる仕掛けの一部と見なしていたという点。もう一つは、ギリシア神話では、ゼウスが人間たちを罰する際に雲を道具として利用することがあったという点である。雲はゼウスの住むとされる天空と関連があるため、ゼウスと近い関係にあり、ゼウスが人間を罰する際の策略として用いうることは理解しやすい(29)。

他にも、Sommerstein (1982)は、コロスによる 302 以下と 563 以下の二箇所の台詞を根拠として、コロスは表面上、ソクラテス、ストレプシアデースたちの味方として振る舞っているに過ぎない、という可能性を指摘している(30)。彼はこの点から、コロスはゼウスをはじめとした伝統的な神々の味方であり、人間たちの不敬や反道徳的振る舞いを罰するためにゼウスの代理としてアテナイへと姿を現したと解釈している。

Dover (1968)は、*Nu.*におけるコロスの性質を詳細に分析しているものの、最終的にコロスが、この劇でどういう役割を演じているのかという点までは明確にしていない。そして、Sommerstein (1982)も、コロスの役割に関して明確な言及があるものの、コロスがゼウスやこの劇での「知」、「倫理観」といかなる関係にあるのかまでは論じていない。

しかし、以下のように考えるならば、コロスの気まぐれな性質に答えを出すことができるよ

うに思われる。すなわち、*Nu.*のコロスは、劇の始めからゼウスの支配下にあり、ゼウスの意志に従って行動していたのではないか。コロスが、ストレプシアデースとその息子を瞑想塾に受け入れたのも、伝統的な道徳、すなわち「伝統的な知」を無視する人間たちを罰するためであり、策略の一部であったと考えることができる。それならば、1458 以下のコロスの態度の変化も、気まぐれではなく、コロスの真の目的を明らかにしたに過ぎないと見なすことができる。この点を、実際の劇での展開に即して考察してみよう。

コロスが登場するのは、275 からであり、その登場の場面ではソクラテスがこのコロスを偉大なる神と称え姿を現すよう乞うて、それに応じる形で登場する。すでに、この 275 の登場の場面の少し前の箇所で、ソクラテスは伝統的な神々を否定する発言をしているのだが（247）、登場直後のコロスの行動はこうしたソクラテスの言動とは正反対のものである（*Nu.* 302-4）。

> οὗ σέβας ἀρρήτων ἱερῶν, ἵνα <u>μυστοδόκος δόμος</u> | ἐν τελεταῖς ἁγίαις ἀναδείκνυται,
>
> （その地(アテナイ)には、口にすることの許されない尊い儀式の聖所がある。そこでは、汚れなき儀式の中で<u>入信者の館</u>の扉が開かれる。）

この箇所はコロスによる歌であるが、ここで歌われている μυστοδόκος δόμος とは、LSJ(s.v. δόμος)では「エレウシスの神殿」とされている。この歌は、この後数行にわたって続いていくのであるが、そこではコロスによってエレウシスの秘儀が称えられているのである(31)。ソクラテスは伝統的な神々を否定しているが、コロスは伝統的な神々を祀るエレウシスの秘儀を称えているのである。こうした点は、*Nu.*ではコロスが登場の時から、ゼウスを中心とした伝統的な神々の側に与していることを示すものと言えよう。

そして、コロスは他にもう一箇所、歌の中でゼウスをはじめとした伝統的な神々を称えている（*Nu.* 563-65）。

> ὑψιμέδοντα μὲν θεῶν | Ζῆνα τύραννον εἰς χορὸν | πρῶτα μέγαν κικλήσκω·
>
> （私は、高みより支配する神々の中の偉大なる支配者ゼウスを、まずはコロスへと呼びかけるのです。）

この後数行にわたって続くこの歌の中で、コロスは他にもポセイドン、太陽神ヘーリオスなどを称えていく。この歌の前後では、コロスが作者アリストパネスになり代わり観客に対して、この *Nu.*という作品がいかに素晴らしいものであるのかという点を力説している(32)。

ここには作者の本音が吐露されているとも言えるだろう。そして、このような保守的なメッセージは、革新的な知や反道徳的な知への揶揄を楽しんだ大多数の観客たちの心に沿うものであったろう。ともあれ、コロスは歌の場面では、自分たちがゼウスを中心とした既存の神々の

体制のもとにあることを仄めかしながらも、ソクラテスやストレプシアデースたちに対しては曖昧な態度を取り続ける。コロスが真の目的を明らかにするのは、この劇のフィナーレに至ってのことである（*Nu*. 1458-61）、

> ἡμεῖς ποιοῦμεν ταῦθ᾽ ἑκάστοθ᾽, ὅντιν᾽ ἂν | γνῶμεν πονηρῶν ὄντ᾽ ἐραστὴν πραγμάτων, | ἕως ἂν αὐτὸν ἐμβάλωμεν εἰς κακόν, | ὅπως ἂν εἰδῇ τοὺς θεοὺς δεδοικέναι.
>
> （我々は、誰であれ邪なことの虜となっている者を見つければ、その度にこれを行っているのです。その者が神々を畏れることを理解するように、その者をわざわいへと投げ込むまで、我々はこれを行うのです。）

コロスは、最後にストレプシアデースに対しこのように述べる。これを聞いたストレプシアデースはすべてを悟り、ソクラテスもろとも瞑想塾を焼き払おうと決意する。

以上のように、雲の女神のコロスたちは劇の始めから、ゼウスなど伝統的な神々の側にあり、ストレプシアデースのような反道徳的な行いを正当化しようと企む人間たちを罰する役割を担っていたとも考えられるのである。そして、ギリシア神話で「雲」がゼウスによる巧妙な策略の道具として使用されているという点を考えると、*Nu*.でのコロスも、当初からゼウスによる策略の一部としてアテナイに送り込まれたと考えることができよう。

５．おわりに

拙論の二節から四節にかけて論じたように、*Nu*.からは前 420 年前後のアテナイで、相異なる三種類の「知」が一定程度の勢力を持っていたと読み解くことができるのである。Hτ.からは革新的でいかがわしい知を、ソクラテスからは「自然哲学的な知」を、そして Kρ.やコロスである雲の女神たちからは既存の道徳・秩序を重んずる「伝統的な知」を見出だすことができたのであった。そして、*Nu*.の時代では、これらの「知」と関係する知者がすべて「ソピステース（σοφιστής）」の名で呼ばれえたのである。

Nu.は作者アリストパネスの初期の著作とされている(33)。アリストパネスは、*Nu*.の直前に『騎士』（*Eq*.）を制作しているが、この作品では当時デマゴーグであったクレオンが批判的に描かれている。そして、*Nu*.よりも 20 年ほど後の作品『蛙』（*Ra*.）ではエウリピデスよりもアイスキュロスの作風を評価する姿勢を打ち出している。こうした点を考慮に入れるならば、アリストパネスは十分に保守的な人物であり、倫理観も含めて、アテナイの民主制が最盛期を迎えていた時代の「知」を理想としていたと考えられる。アリストパネスが著作活動を始めた時期は、ペロポネソス戦争勃発後の時代であり、そのころのアテナイではトゥキュディデス（Th. 2. 53.4）が記録しているように「神々への畏敬や、人間社会の法律」は力を失いつつあったことは想像

に難くない。

アリストパネスは喜劇というジャンルを通して、伝統的な道徳の擁護に努め、*Nu.*で描かれているような、この時代の新たな知の胎動とそれが引き起こすであろう道徳的危機を少しでも観客に伝えようとしたのではないか。*Nu.*でのソクラテス像が、後年ソクラテスの悪評に繋がってしまったとしても、それを完全にアリストパネス個人の責めに帰することは当たらないであろう。*Nu.*という作品が実際のソクラテス像に与えた影響が大きいとしたら、それはアリストパネスがこの劇で意図したこととは別の事態が独り歩きしてしまったということではないだろうか。

注

(1) 伊藤（1982 年）、29-34 参照。

(2) 思想史や歴史学の研究では、前 443 年のペリクレスによる政敵トゥキュディデス追放から前 429 年のペリクレスの死までの期間を「ペリクレス時代」としている。拙論もこの時代区分に従うこととする。Romilly (1992), vii., Wallace (2007), 226., 伊藤（1982 年）、78 参照。

(3) 作品名の略号は Liddell-Scott-Jones, *Greek-English Lexicon*（以下 LSJ）にならう。

(4) 学校の名称は、ギリシア語原文では φροντιστήριον となっている。後述するように、この学校名をどのように解釈するのかという点は、この作品で表されている「知」をどのように解釈するかという拙論にとって重要な点と密接に結びついている。しかし、基本的には便宜上の観点より、橋本（2008 年）による日本語訳に従うこととする。

(5) 納富（2015 年）、73 参照。

(6) Dover (1968), lvii-lviii.これら二つの論法は、それぞれ古注で ὁ δίκαιος λόγος と ὁ ἄδικος λόγος と呼ばれてきたとされる。

(7) κρείττων λόγος と ἥττων λόγος の訳語については、橋本（2008 年）訳を採用した。

(8) Romilly (1992), x., Wallace (2007), 233-34.

(9) Wallace (2007), 218.

(10) この台詞で、雲の女神たちは、後にストレプシアデースが被ることになるわざわいを、「素晴らしい利益（καλὸν）」と皮肉を込めて表現している。

(11) Dover (1968), 144.

(12) F・ハイニマン（1983 年）によれば、「ノモス νόμος」の語の起源を特定することは難しいが、その最古の使用例はヘシオドス『仕事と日』276 以下とされている。ノモスの語は「普遍的拘束力を持つ秩序」という意味を獲得していたものの、前 5 世紀半ば以降は理性主義的思想の影響を受けて「一般に広まっているが、しかしたいていは誤った、大衆の考え」とされるようになったとされている。一方で、「ピュシス φύσις」については名詞であるものの、ギリシア語の動詞で同じく φυ-を含む φύω（動詞「生じる」、「成長する」）と同様、その本来の動詞的な力を常に保持してきたとされている。ギリシア世界で自然科学的思想が広まるにつれて、ピュシスには外的な介入を受けずに生起し、生成したものと言う概念が見出され、その結果、基準、さらには規範としての価値的な側面が見出されるようになったとされる。このアゴーン場面においても見出される「ノモス／ピュシス」の対立はアンティポンが最初に論じたとされており、ハイニマンは「アンティポンの思想の基礎にあるのは、『ピュシスの必然』への確信である。それによれば、コスモスの属するおよそすべてのものは、したがってまた人間も、一定の法則に縛られており、その法則は万物の本質にもとづいており必然的なものである、すなわち、変更することも罰を受けずに違反することもできない第一次的で絶対的な行動規範である」（同書、158）と指摘している。

(13) F・ハイニマン（1983 年）、84-89 参照。

(14) プラトン対話篇では、「ノモス／ピュシス」の対立図式により道徳を説く場面が複数箇所

ある。有名なものでは『プロタゴラス』（337C-E）のヒッピアス、『ゴルギアス』（482E-484C）のカリクレス、『国家』（358E-360D）のトラシュマコスとグラウコンが挙げられる。その中でも特に『ゴルギアス』におけるカリクレスの「強者の正義」説が有名であろう。この対話篇の中でカリクレスはピュシスを重視する立場を明確にし、強者が弱者を支配することこそが自然本来のあり方であると主張する。しかし、対するソクラテスは神の前での人間の無知を強く意識しているため、世俗の道徳とは異なる「真の道徳」の存在を想定しており、これに反論する。プラトンの描くソクラテスは、「ノモス／ピュシス」の対立図式とは異なる次元で道徳を考えているのである。カリクレスとソクラテスの間には、全知を標榜する「ソフィスト」と無知を自覚する「哲学者」という重大な差異がある。

(15) Romilly (1992), 10., 納富（2015 年）、69-70 参照。

(16) 納富（2015 年）、77-79 参照。

(17) Dover (1968), xl.

(18) 田中（1938 年）、111。

(19) ディオゲネス・ラエルティオスによれば、自然哲学者アナクサゴラスは前 480 年にアテナイへとやって来て 30 年間逗留したとされる。アナクサゴラスは太陽のことを「灼熱した金属の塊である」と言ったために、不敬罪の廉で訴えられ死刑を宣告されたとされている。ディオゲネス・ラエルティオス（1984 年）、122-29 参照。

(20) Dover (1968), 232.

(21) TLG を用いて、*Nu.*全体を σοφ-で検索すると 32 件該当があった。それらを原典テクストと照合し、前後の文脈も考慮に入れた結果、全件が「知」と関連する使用例であると判断した。そして、同様に φρον-（関連する φρων-、φροσ-も含む）で検索すると合計で 50 件の該当があり、こちらも σοφ-と同様の方法で、全件を「知」と関連のある使用例と判断した。

(22) Dover (1968), 144 では、331 の σοφιστής の使用例が、「好ましくない、もしくは役に立たないと考えられていた技術・教養を教授する教師」という意味の、恐らく最古の使用例であろうとしている。

(23) この 16 件は、参照した OCT テクストでは以下の行となる。101, 154, 225, 226, 229, 233, 266, 456, 695, 723, 724, 735, 740, 741, 762, 1039.

(24) Dover (1968), xliii-xliv でも、この劇でのソクラテスの指導方法は、プラトンが対話篇で描いたような、ソクラテスによる問答法の戯画化であると指摘している。こうした点からも、アリストパネスが実際のソクラテス像を歪曲することなく描いている可能性があると言えよう。

(25) 田中（1938 年）、113 において、田中も拙論と同様の解釈をしている。

(26) Dover (1968), xlv-lvii の 10 頁以上にわたる分析では、アリストパネスがソクラテスと「ソフィスト」との違いを認識していた可能性を指摘している。しかし、アリストパネスはポリス社会において哲学を重要なものとは考えていなかったので、この劇でソクラテスを喜劇的に描いたのであろうと推測している。拙論もこの Dover の見解に同意する。

(27) Segal (1996), 162-63 のように、この劇でのコロスの曖昧さは、むしろアリストパネスの意図であったと考える研究もある。

(28) Dover (1968), lxvii-lxviii.

(29) Dover (1968), lxviii では、ピンダロス『ピュティア祝勝歌集』第二歌(Pi. *P*. 2. 36)に登場するイクシオンの例を挙げている。イクシオンがヘラを誘惑したために、ゼウスはイクシオンのもとへ、ヘラの姿に似せた「雲」を送り込んだのである。イクシオンは雲と気付かず、ヘラの幻影である雲と添い寝し、結果ゼウスによって罰せられることとなった。この神話での雲は、ゼウスの策略の一部と見なせるであろう。

(30) Sommerstein (1982), 176-77, 191.

(31) Sommerstein (1982), 141.

(32) Dover (1972), 103-4.このような内容になっているのは、現存する *Nu.*が改作後のものであり、第一作目が競演の結果最下位の第三位に終わったことが関係しているとされている。

(33) Dover (1968), xvii-xxiii., Sommerstein (1982), 2-4., Olson (2021), 2-5.

古典テクスト

Wilson, N. G. (ed.), (2007), *Aristophanis Fabulae: Tomus I* (Oxford: Clarendon Press).

主要参考文献

Bonazzi, M., (2020), *The Sophists*. Greece & Rome New Surveys in the Classics No. 45 (Cambridge: Cambridge University Press).
Dover, K. J. (ed.), (1968), *Aristophanes, Clouds* (Oxford: Clarendon Press).
Dover, K. J., (1972), *Aristophanic Comedy* (Berkley / Los Angeles: University of California Press).
Guthrie, W. K. C., (1969), *A History of Greek Philosophy III* (Cambridge: Cambridge University Press).
Konstan, D., (2014), 'Crossing Conceptual Worlds: Greek Comedy and Philosophy', in ed. by Fontaine, M. and Scafuro, A. C., *The Oxford Handbook of Greek and Roman Comedy* (Oxford: Oxford University Press), 278-94.
Liddell, H. G. and Scott, R., (1940), *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones (Oxford: Clarendon Press).
MacDowell, D. M., (1995), *Aristophanes and Athens: An Introduction to the Plays* (Oxford: Oxford University Press).
Olson, S. D., (2021), *Aristophanes' Clouds: A Commentary* (Ann Arbor: University of Michigan Press).
Romilly, J. de, (1992), *The Great Sophists in Periclean Athens*, trans. by Lloyd, J. (Oxford: Clarendon Press).
Scullion, S., (2014), 'Religion and the Gods in Greek Comedy', in ed. by Fontaine, M. and Scafuro, A. C., *The Oxford Handbook of Greek and Roman Comedy* (Oxford: Oxford University Press), 340-55.
Segal, C., (1996), 'Aristophanes' Cloud-Chorus', in ed. by Segal, E., *Oxford Readings in Aristophanes* (New York: Oxford University Press), 162-81.
Sommerstein, A. H. (ed. and trans.), (1982), *Aristophanes, Clouds* (Warminster: Aris & Phillips Ltd, repr. 1991).
Wallace, R. W., (2007), 'Plato's Sophists, Intellectual History after 450, and Sokrates', in ed. by Samons II, L. J., *The Cambridge Companion to The Age of Pericles* (Cambridge: Cambridge University Press), 215-37.

アリストパネース「雲」『ギリシア喜劇全集１』橋本隆夫（訳）、岩波書店、2008 年。
伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982 年。
田中美知太郎「『雲』のソクラテス」『田中美知太郎全集７』筑摩書房、1969 年（初版、1938 年）。
田中美知太郎「ソフィスト」『田中美知太郎全集３』筑摩書房、1969 年（初版、1941 年）。
ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（上）』加来彰俊（訳）、岩波文庫、1984 年。
トゥキュディデス『歴史１』藤縄謙三（訳）、京都大学学術出版会、2000 年。
納富信留『ソフィストとは誰か？』ちくま学芸文庫、2015 年。
ピンダロス『祝勝歌集／断片選』内田次信（訳）、京都大学学術出版会、2001 年。
プラトーン「ソークラテースの弁明」『ソークラテースの弁明・クリトーン・パイドーン』田中美知太郎（他訳）、新潮文庫、1968 年。
プラトン『国家（上）』藤沢令夫（訳）、岩波文庫、1979 年。
プラトン『ゴルギアス』加来彰俊（訳）、岩波文庫、1967 年。
プラトン『プロタゴラス』藤沢令夫（訳）、岩波文庫、1988 年。
F・ハイニマン『ノモスとピュシス―ギリシア思想におけるその起源と意味』廣川洋一（他訳）、みすず書房、1983 年。